

写真で見る北陸地方における災害発生地点の今と昔

福井工業高等専門学校 ○高田祐紀代
福井工業高等専門学校 正会員 吉田雅穂

1. はじめに

人々の住む町の風景は、建設工事などにより日々変化しているが、比較的サイクルの長い大災害、例えば地震、台風、洪水、大雪などの自然の営みや、人為的な災害によって時として大きな変化が生じることもある。災害直後はその悲惨な風景を目の当たりにして、二度とこれを繰り返すまいと強く感じるが、月日が流れていくの間にかその風景は日常の風景となり、過去の惨状は人々の脳裏から消え去ってしまう。著者らはこれまで、地域の地震防災や防災教育に関する研究を実施してきており、被災地の人々の防災意識を向上させ、さらに継続させていくためには、単に過去の災害の出来事を言葉として伝えるだけでは不十分であり、人々の住む地域に発生した災害前後の風景の変化を視覚的に伝えることも重要であると考えている。北陸地方においては、1948 年福井地震に代表される地震災害や風水害、雪害など、比較的再来周期の長い大災害が幾度となく発生しているが、これらの災害から得られた教訓がその後の人々の防災意識の向上とその継続にうまく活用されているか、という点については少なからず疑問を感じている。

そこで本研究では、このような大災害の被災直後の状況と現在の無被害の状況を写真で対比することにより当時の悲惨な様子をより浮き彫りする手法を用いて、人々の防災意識の向上と継続に役立たせるための教材を作成することを目的として、数多く残る災害記録写真を収集、整理し、その撮影地点の特定作業および現在の様子の写真撮影を行った。平成 13 年度より福井県の災害を対象として本研究に着手しており、本年度はその対象地域を北陸地方へと展開させた。本文では、新潟県の 1964 年新潟地震、石川県の 1993 年能登半島沖地震、富山県の昭和 44 年水害における災害写真の一部を紹介する。

2. 新潟地震

写真-1 は地震直後の昭和大橋の様子であり左岸下流の北北東側から撮影したものである。被害の顕著であった新潟市では街の中心部を流れる信濃川に架かる万代橋、八千代橋、昭和大橋の 3 橋がことごとく損壊してしまった。当時、昭和大橋は新潟地震の起きる 2 週間ほど前に完成したばかりだったが、12 箇所ある橋桁のうち 5 箇所が落下した。**写真-2** は現在の様子であり、橋脚の形状は当時と同様だが 2 列に増やされて強化されている。

写真-3 は明石通りにある 4 階建ての清水商店ビルを東側から撮影したものであり、ビルが大きく傾斜している様子がよく分かる。当時はこのような液状化被害が数多く見受けられ、市内の 1500 ある鉄筋コンクリート建築のうち 40%以上が傾いたり沈下したりした。このような特徴的な被害が顕著であったのは、当該地盤が軟弱な砂層で形成された大河川の河口付近に位置しており、また建物の基礎構造が不十分であったことによるものである。**写真-4** は現在の様子であり、当時のビルの地点は郵便局の一部になっている。

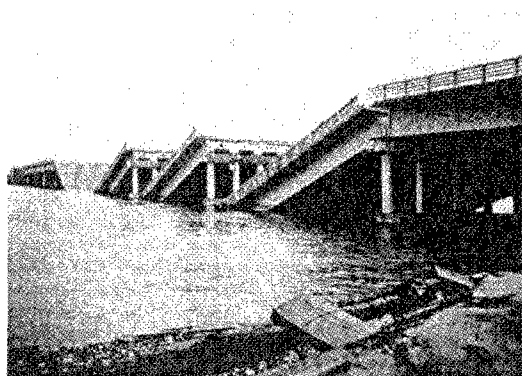


写真-1 昭和大橋（北陸建設弘済会）



写真-2 現在の様子（H14.10.17 撮影）

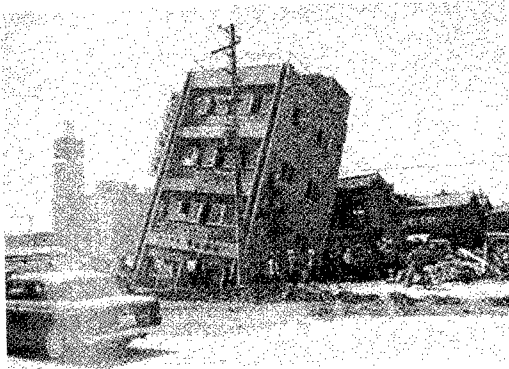


写真-3 明石通り（毎日新聞社）



写真-4 現在の様子（H14.10.17撮影）

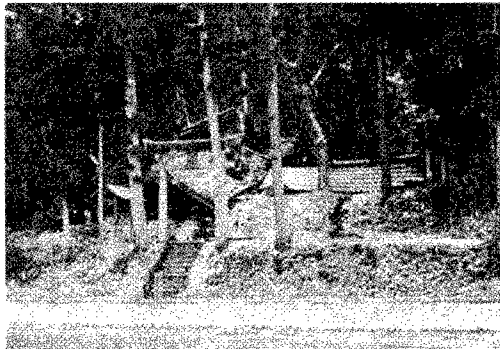


写真-5 火宮神社（石川県土木部）

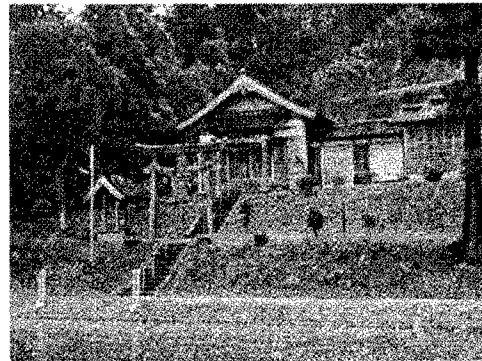


写真-6 現在の様子（H14.11.16撮影）

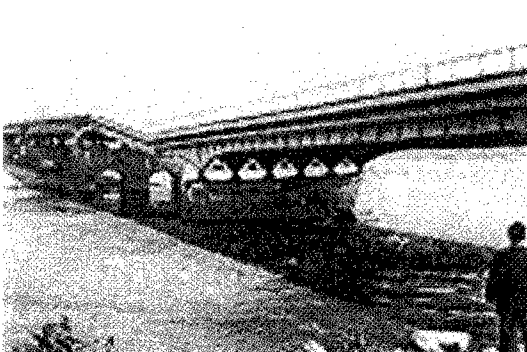


写真-7 富山大橋（北陸建設弘済会）

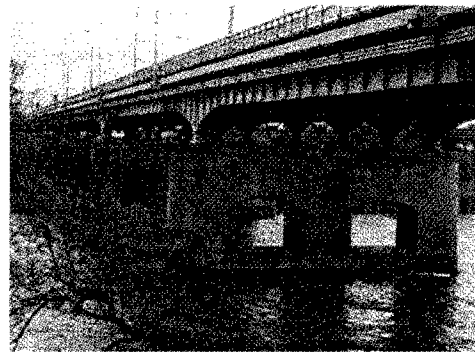


写真-8 現在の様子（H14.11.2撮影）

3. 能登半島沖地震

写真-5 は珠洲市正院町の火宮神社を南南東から撮影したものであり、拝殿が倒壊している様子が分かる。この地震では、液状化や斜面崩壊などの地盤災害が数多く発生した。また、この地方には築後年数を経た土蔵が多く、液状化や老朽化のために被害を受けたケースも目立った。写真-6 は現在の様子であり、新しく建て替えられている。

4. 昭和44年水害

写真-7 は富山市内の神通川に架かる富山大橋を北西から撮影した様子であり、橋脚の一部が強い水流によって元の位置から2.5m沈下し、路面がV字型に陥没した。このため、この橋を通る国道8号線は長期間通行止めとなり、人々の生活に大きな影響を与えた。また、この豪雨は富山県内各地に被害をもたらした。常願寺川上流では土石流が発生した。写真-8 は現在の様子であり、被災から約一年かけて改修された。昭和11年に架けられたこの橋は市のランドマークでもあるが、現在は老朽化のため架け替えが計画されており約10年後には姿を消すことになっている。

5. おわりに

今後は、収集した写真や資料などをデジタルデータとして教材化し、防災啓蒙のためのツールとして地域社会や教育現場などの広い範囲で公開していく予定である。なお、本研究は社団法人北陸建設弘済会第9回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業の補助を受けており記して謝意を表する。